

Notes on Homophonous Affixes (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 丘 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4143

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



同音接辞についての覚え書き（その1）

村 上 丘

0. はじめに
1. 〈対〉のモデル
2. 同音接尾辞 〈-y/-ey〉
3. 同音接尾辞 〈-ise/-ize〉
4. 同音接尾辞 〈-et/-ette〉

0. はじめに

本稿の目的は、綴り字に関して変異形を有する英語の接辞に焦点を当て、その表記と発音との対応関係について資料を検索し、そこに見られる一般性を抽出することである。

例えば、英語の〈指小辞〉(diminutive)に〈et/-ette〉がある。これらは〈cigar〉に結合し、〈cigaret/cigarette〉という綴り字の変異形(variant spellings)を生む。ソシュールは、このような、一定しない書き様を、「ふらつき正書法」と呼んだ。これらは、音を書き表そうとして、さまざまな時代・地域になされた言語使用者の試みの集積であり、表記上の固定した規則が、言語共同体内に定着していないことを示す。

特定の表記が、2つの変異的表記を持つ場合、それぞれの変異形の出没は、通例、語彙的に規制される。ただし、その規制は、必ずしも、排他的な関係にあるわけではない。換言すれば、それぞれの変異形のうち、一方しか許容されない場合と、両方が許容される場合とがある。すなわち、次のような現象が観察される。

- (1) ① 大部分の単語において、発音/a/が表記〈b〉に対応する。
- ② 少数の単語において、発音/a/が表記〈c〉に対応する。
- ③ 極一部の単語において、発音/a/が、上記2つの表記〈b〉〈c〉に対応する。

表記上の変異形を有する接字は、〈同音接辞〉(homophonous affix)と呼ぶことができる(Carney 1997)。〈同音接辞〉は、さらに、〈同音接頭辞〉と〈同音接尾辞〉とに分類することができる。前者には、**en-/in-**(enforce, invoke, enclose/inclose), **fore-/for-**(forecast, forgive, forego/forgo)等が含まれる。一方、後者には、**-y/-ey**(noisy, gluey, nosy/nosey), **-er/-or**(subscriber, spectator, advisor/adviser), **-et/-ette**(pamphlet, roulette, omelet/omelette), **-ize/-ise**(symbolize, compromise, baptize/baptise), **-s/-es**(memos, potatoes, cargos/cargoes), **-ys/-ies**(keys, files, moneys/monies), **-xion/-ction**(defection, complexion, connection/connexion)等が属する。

上記に示した資料は、種々の観点から見て混質的である。①それらは〈**-y/-ey**〉, 〈**-er/-or**〉 などのような〈派生接辞〉と、〈**-s/-es**〉, 〈**-ys/-ies**〉 などのような〈屈折接辞〉を含む。②それらは、自由形式の語基に結合する〈**-ize**〉のような接辞と、拘束形式の語基に結合する〈**-ise**〉のような接辞を含む。前者は、透明であり、後者は、不透明である。③それらは、2つの異なる綴り字で表記される接辞が、同一の語族に遡ることができる〈**-ise/-ize**〉の場合と、そうではない〈**-en/-in**〉の場合を含む。特に、後者の場合、接辞が、それと異なる語族に属する語基と結合する現象を呈する。語族が異なる語基と接辞が結合した場合、〈混成語〉(hybrid)が生じる。

本稿では、次のような原則のもとに、議論を進める。

- (2) ① 〈同音接辞〉が、〈派生接辞〉か〈屈折接辞〉かの区別は、考慮しない。
- ② 〈同音接辞〉が、〈自由形式〉の語基に結合するか、〈束縛形式〉の語基に結合するかとの区別は、考慮しない。
- ③ 〈同音接辞〉が、同一の語源に遡るか否かは、考慮しない。

本稿では、〈同音接辞〉の特徴を共時的に記述することを目標とするが、それにあたり、特定の接辞に共起する語基の成員間に、歴史的な要因が特定化できれば、むしろそれを積極的にとりこむ。〈混成語〉を、当該の言語要素の属する語族に言及することなしに記述することは、言語学的に、無意味であるからである。

1. 〈対〉のモデル

〈同音接辞〉が、しばしば、〈混成語〉と関連することを、前節で管見した。〈混成語〉は、いわば、〈類推〉(analogy)による語形成であり、その根底には、言語要素同士の類似性に対する言語使用者の(無)意識があると考えられる。〈同音接辞〉は、同音語としての音声的属性、接辞としての文法的属性、同義語としての意味的属性など、言語のさまざまなレベルにまたがる類似性を共有する。したがって、〈同音接辞〉に関する考察においては、この類似性に着目することが、有効であると思われる。

〈対〉(pair)という概念は、階層構造に基づかない開放的システムで、言語要素間の類似性に立脚する(村上(1996a, 1996b, 1997, 1999))。したがって、〈対〉は、〈同音接辞〉のような現象には、とりわけ、効力を発揮するものと考えられる。〈対〉は、次のように規定される

(3) 範列関係を有する言語要素 x と y に関し、次のような条件が整備されたと仮定する。

- ① x と連辞的關係を有する集合を P とする。
- ② y と連辞的關係を有する集合を Q とする。
- ③ P と Q の共通部分を C とする。

(4) 言語要素 x と y は、〈対〉をなすと次のような特性を持つ場合がある。

- ① x と y は、有標と無標として特徴づけられる。
- ② x と y は、能動的、受動的として特徴づけられる。
- ③ P と Q は、典型性と周辺性を有する。

形式 x と形式 y は、範列的關係を構成する言語形式であるので、2項対立機能を有する。しかし、その形式と連辞的關係を有する言語記号は、両形式に排他的に属するわけではない。すなわち、 x と y とに共起する成員は、相互排他的ではなく、部分的に共存する。2つの集合に共通して属する C の成員は、〈競合形式〉として具現する。

〈有標〉と〈無標〉は、多義的・相対的な概念である。〈同音接辞〉に関しては、不透明かつ・または生起頻度が低いものが〈有標〉であり、透明か

つ・または生起頻度が高いものが〈無標〉であると仮定する。

〈能動的〉と〈静態的〉という用語は、次のように規定される。XとYとの交差領域であるCにおいて、その成員の特徴は、理論的に、次の3通りが考えられる。

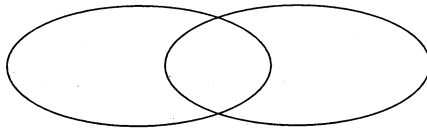
- (5) ① Pの成員しかそこに検出されない。
- ② Qの成員しかそこに検出されない。
- ③ PともQとも異なる成員が、そこに検出される。

①は、言語要素yの〈生産性〉に質的变化が生じたことを意味する。なぜなら、そこにおいて、yがQの成員だけでなくPの成員とも共起するようになり、その結合能力が拡大したことを意味するからである。一方、xの〈生産性〉に質的变化は生じない。この場合、yは、語結合が活性化されたので、〈能動的〉(active)であると認定する。それに対し、xは、その語結合の能力に変化はないので、〈静態的〉(stative)である。②の場合は、それと反対に、xが〈能動的〉であり、yが〈静態的〉である。③の場合は、上記のどちらでもないので、〈能動的〉、〈受動的〉の用語では、処理できない。

〈典型性〉は、範疇と関わる。すなわち、特定の範疇に属する成員が、すべて、同一の資格を有するわけではなく、あるものは、その中核的な役割を演じ、あるものは、末梢的な位置に甘んずる。前者は〈典型的〉であると認定され、後者は〈周辺的〉であると認定される。

これを、モデルで表すと、以下のように図式化することができる。

- (6) x (有標) y (無標)



上記の規定における〈有標・無標〉〈能動・受動〉〈典型・周辺〉の概念は、〈対〉の成立とともに、自動的に導き出されるものではない。①〈有標・無

標〉の対立は、生起頻度と透明性に基づくが、両者が常に検出されるわけではない。②〈能動・受動〉の対立は、Cの領域における勢力の差異が鍵となるが、その差異が常に検出されるわけではない。③〈典型・周辺〉という概念は、いかなる範疇にも検出できる概念ではない。すなわち、xおよびyという言語要素に共起するという形式的類似性は、必ずしも(意味・語源など)非形式的基盤によって、動機づけられているとは限らない。それは、不規則動詞の意味的特性を抽出する試みが如何に困難かを想像すれば、事足りるであろう。

2. 同音接尾辞 <-y/-ey>

/-i/は、名詞から形容詞を形成する極めて生産的な接辞である。形成された語は、「…の特徴を持った、…の多い」の意を表す段階的形容詞で、しばしば、口語的な色調を帯びる(Quirk et al. 1985: 1553)。この接尾辞には、<-y>と<-ey>という2つの表記上の変異形がある。

- (7) a./-i/≡<-y> (ex. rainy<rain)
 b./-i/≡<-ey> (ex. skyey<sky)

当該の接辞を有するすべての語が、語基と派生関係を持つわけではない。OEに由来する語のいくつかは、その語源的な関係を失っている(ex. empty, dizzy, giddy, merry)。

つぎのような略号を採用しよう。

- (8) 語末に、接尾辞/-i/が付加した場合、
- ① 当該の個所が、<-y>として表記される語の集合をPとする。
 - ② 当該の個所が、<-ey>として表記される語の集合をQとする。
 - ③ 当該の個所が、両者の表記を許す語の集合をCとする。

dreamy (<dream), cludy (<cloud)のように、語基が子音で終結する語に関しては、問題は生じない。問題は、語基が黙字<e>で終結する場合である。それに着目しながら、それぞれの成員を観察しよう。Pの成員は、以下のとおりである。

- (9) [OE] icy(OE), stony(OE)
 [13C] easy(a1200<OF ease), hasty(?a1280<OF haste)
 [14C] holey(a1300<OE hole), bony(a1398<OE bone), rosy(1381<OE rose), gluey(a1398<OF)
 [16C] chancy(1513 < ME chance), greasy(1514 < OF grease), spicy (1564<OF spice), crazy(1576<ON craze), shady(1579<OE shade),spicy(1562 < ME spice), spongy(1539 < OE sponge), wavy(1562 < OE wave), Wiry(1588<OE wire)
 [17C] nervy(1607<L nerve), noisy(1693<ME noise)
 [18C] breezy(1718<Osp breeze), shaky(1703<Oeshake), spiky(1702 <ME spike)
 [19C] lacy(1804<OF lace), bluey(1802 <OFblue)

Q の成員は、以下のとおりである。

- (10) clayey(c1384<OE), skyey(1604<ON)

C の成員は、次のとおりである。

- (11) [14C] smoky/smokey(c1300<OE smoke)
 [16C] horsy/horsey(1591OE)
 [17C] nosy/nosey(1620<OE nose)
 [19C] homy/homey(1856<OE home), mousy/mousey(1812<OE mouse), poky/pokey (1849<ME poke), piny/piney (1857<lateOE pine), stagy/stagey (1860<OF stage), gamy/gamey (1844<OE game), horsy/horsey (1591<OE horse)
 [20C] phony/phoney (1900<Ir phone), cagy/cagey (1909?<ME cage), maty/matey (1915<ME mate)

<-y> は、数多くの語に付加する〈無標形式〉である。〈-ey〉は、限られた語に付加する〈有標形式〉である (Burchfield 1998: 277)。

Cの集合は、(典型性は異なるにせよ) Pの集合とほぼ重複する。この点で <-ey> は、<能動的> であり、<-y> は、<静態的> である。この事実から、次の原則を抽出することができる。

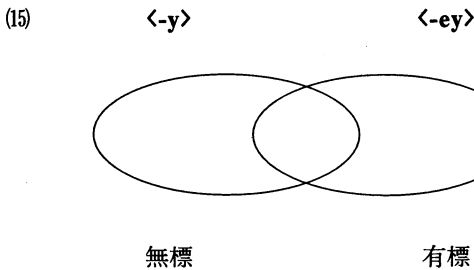
- (12) 同音接尾辞 <-y/-ey> において、前者は、無標で静態的であり、後者は、有標で能動的である。

それぞれの成員は、次のように特徴付けることができる。

- (13) ① Pの成員の典型性は、<-y> で終結しない単音節語であるという事実である。かつ、16世紀に遡ることができるという事実である。
 ② Qの成員の典型性は、<-y> で終結する単音節語であるという事実である。(<-e-> は、yが連続することを避けるために挿入されたものである (『英語語源辞典』))。

- (14) Cの成員の典型性は、<-y> で終結しない単音節語であるという事実である。かつ、19世紀に遡る事ができるという事実である。

以上の関係は、次のような図表で明らかにすることができる。



上記において、PおよびQの典型性は、時間的要因および表記形式という、まったく異なる要因によって規定される。このことから、次のような原則を抽出することができる。

- (16) P および Q の成員における典型性は、複数の、あい異なる要因によって成立する場合がある。

3. 同音接尾辞 <-ise/-ize>

英語における生産的な動詞形成接辞の数は少なく、<-ate>, <-en>, <-ity> が挙げられるに過ぎない (Quirk et al. 1985)。そのなかで、きわめて生産的な接辞は、<-ize> で、形容詞と名詞の語基に付加される。語末における /-aiz/ は、次のように <-ize> と <-ise> の2種類の表記上の変異形を有する。

- (17) a. /-aiz/ ≡ <-ize> (ex. civilize)
 b. /-aiz/ ≡ <-ise> (ex. surprise)

前者は、有声音を表す字母 (<z>) とその発音 (/z/) とが1対1に対応し、表記と発音との平行関係が保たれている。この成員は、数の上でも優勢であり、自由形式の語幹に結合するので <無標> である。一方、後者には、字母と発音とが1対1に対応しておらず、もう一方に比べ、その成員の数は少ない。また、拘束形式の語幹に結合するので <有標> である。次のような略号を導入しよう。

- (18) 語中に言語表記 /-aiz/ を含む多音節語において、
- ① 当該の個所が <-ize> として表記される語の集合を P とする。
 - ② 当該の個所が <-ise> として表記される語の集合を Q とする。
 - ③ 当該の個所が、両者の表記を許す語の集合を C とする。

P の成員は、以下のとおりである。

- (19) [15C] scandalize(1489 Gk), organize(1413 Gk), harmonize(1483 Gk)
 [16C] symbolize(1591 Gk), apologize(1597 Gk), characterize(1591 L)
 [17C] specialize(1613 L), neutralize(1655 L), realize(1611 L), economize(1648 L), criticize(1649 L)
 [18C] idealize(1786 L), localize(1792 L), generalize(1751 L), italicize

(1795 L), democratize(1798 Gk), dramatize(1780 Gk)

[19C] emphasize(1828 Gk), synthesise(1828 Gk), socialize(1828 L),
nationalize(1800 L)

Q の成員は、以下のとおりである。資料は、Burchfield(1988: 418-19), Lewis (1962: 114)に基づく。

(20) [13C] devise(?1255 OF)

[14C] advise(c1300 OF), disguise(?a1300 OF), surprise(c1390 OF)

[15C] advertise(1425 OF), comprise(c1425 OF), compromise(1426 OF),
enterprise(c1440 OF)

[16C] revise(1567 OF)

C の成員は、以下のとおりである。この場合、2通りの表記法は、常に交換可能であることを意味するわけではない。すなわち、両者は、地理的に、その具現が規定される。-ise は、イギリスならびに、オーストラリアで通例用いられる用法である (CIDE)。

(21) [13C] baptize~baptise(1280 Gk)

[14C] authorize~authorise(c1383 L), liquidise~liquidize(1837 L)

[15C] harmonize~harmonise(1483 Gk)

[16C] naturalize~naturalise(1593 L), sympathize~sympathise(1591
Gk)

[17C] civilize~civilise(1601 L)

[18C] materialize~materialise(1710 L)

C の成員は、P と Q の成員に連続的にまたがっている。したがって、〈能動的/静態的〉の特徴を、この事例から抽出することは困難である。このことから、次の原則を導くことができる。

(22) 〈同音接尾辞〉〈-ize/-ise〉において、前者は、無標であり、後者は、有標である。

それぞれの会員の特徴は、以下のとおりである。

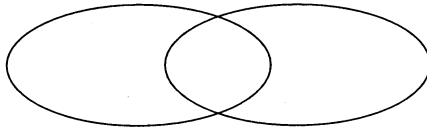
- (23) ① Pの会員は、15世紀から19世紀にかけてギリシア語あるいは、ラテン語から借用された語群である。
- ② Qの会員は、フランス語に遡る語群である。

上記に示した語基の典型性は、接辞自身の属する語族と密接に関わっている。すなわち、<-ize>は、最終的に、ギリシア語に遡るが、<-ise>は、フランス語に遡る。両者の帰属する語族は、まったく異なるが、(二重母音+摩擦音という)音声の特徴、(接辞という)文法的特徴、(使役の意味という)意味の特徴が類似するため、両者が<対>を構成すると考えられる。

<対>の成立には、2項の間で、類似性がいずれかのレベルで満足される必要がある。その類似性は、たとえ、2項の帰属する語族が異なっていようと、他の条件が満足されれば、成立する。

当該の同音接辞は、以下のように図式化することができる。

(24) <-ize> <-ise>



無標

有標

4. 同音接尾辞 <-et/-ette>

名詞に付加し、名詞を形成する<指小辞>(diminutive)に、語末における<-et/>がある。この接尾辞は、次のように、<-et>と表記される場合と、<-ette>と表記される場合がある(Quirk et al. 1985)。

- (25) a./-et/≡ <-et> (ex.banquet)
- b./-ette/≡ <-ette> (ex.marionette)

現代英語におけるそれぞれの要素の分析は、次のようにまとめることができる。

(26) 語中に言語表記/**-et**/を含む多音節語において、

- ① 当該の個所が **<-et>** として表記される語の集合を P とする。
- ② 当該の個所が **<-ette>** として表記される語の集合を Q とする。
- ③ 当該の個所が、両者の表記を許す語の集合を C とする。

P の成員は、以下のとおりである。

(27) **[13C]** basket(1209 OF)

[14C] dragonet(?a1300 Gk), tablet(c1300 OF), hatchet(1307 OF), pocket (1350 AF)

[15C] packet(?1450 MLG), casket(1461 OF), cabinet(1549-1667 F), falconet(1559 LL)

Q の成員は、以下のとおりである。

(28) **[17C]** gazette(1605), marionette(c1620 F)

[18C] novelette(1780 L), roulette(1734 F), cassette(1793 F), silhouette(1798 F), etiquette(1750 F), croquette(1706 F)

C の成員は、以下のとおりである。

(29) **[16C]** bassinet(te)(1578-1727 F), brunet(te)(c1535-40 F)

[17C] omelet(te)(c1611 L), nymphet(te)(1612 L), coquet(te)(1611 F)

[18C] quartet(te)(1790 L), satinet(te)(1703 F) quartet(te)(1790 F)

[19C] pipet(te)(1839 F), cigaret(te)(1835 F), octet(te)(1864 It), quintet (te)(1811 F), sextet(te)(1841 L)

[20C] laundaulet(te)(1949 F), kitchenet(te)(1910 L)

〈-et〉は、〈拘束形式〉の語基に結合し、〈-ette〉は、〈自由形式〉の語基に結合している。この点で、前者は〈有標〉、後者は〈無標〉であると考えられる。有標の場合、これらの語の多くにおいて、〈-et〉は、指小辞としての働きを失っている。

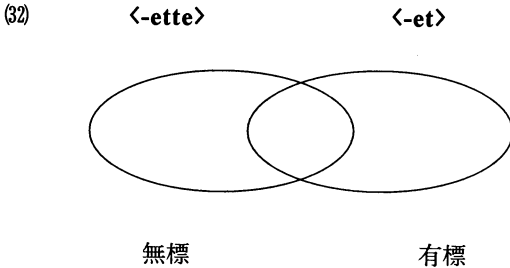
Cの成員を見ると、その内実は、ほぼQの成員と同一である。したがって、Pは、〈静態的〉であり、Qは、〈能動的〉であるということができる。このことから、次の原則を導くことができる。

- (30) 同音接尾辞 〈-et/-ette〉において、後者は、有標で能動的であり、前者は、無標で静態的である。

それぞれの成員は、次のようにまとめることができる (Burchfield 1998)。

- (31) ① Pの成員は、14～15世紀にフランス語から借用された語である。
 ② Qの成員は、17世紀以降、英語に流入した。

この関係は、次のように図式化することができる。



[参考文献等は、次稿に掲載する。]